

PMS 訓練所讓渡式

地域の全勢力終結



(解説) ミラーン訓練所の合法的な足固めは、この二年間の最大の懸案の一つであった。その正式発足は、「取水設備普及計画」に際して、今後の行政側の理解、地域指導者の協力を得るうえで不可欠のものであった。訓練所の建物はFAO(国連食糧農業機関)との協力で2017年10月に落成し、日本の支援室の協力を得て手引書の出版、山田堰模型ら教材準備を行ってきた。紆余曲折の末、今年1月にカリキュラム作成がなり、公式にはFAO主導で地域指導者・技術者を対象とした研修計画が具体化され、現在実施中である。

この脈絡の中で取水堰の構造をより明確に示すべく、「山田堰」に模したカマ第二堰の改修が行われ、地域全体に高い関心を引き起こし、「普及活動」はかなり現実味を帯びて期待されるようになっていた。残るは、訓練所のPMSへの正式譲渡で、規定ではFAO→政府農業省→PMSへと受け渡されることになっていたが、土地問題を引きずって延期を重ねてきた。最悪の場合、二年間の努力が水泡に帰する恐れもあった。PMS指導層とFAO所長の努力もあずかって、カブールの独立土地管理局と農業省が動き、事態はアフガン政府の閣議決定に及んで実現した。現大統領による積極的な支持があったことは言うまでもない。

署名式の準備は極秘のうちに行われ、前日4月22日には七里所長以下FAOの一行が到着、今後について意見交換が行われた。4月23日午前9時、物々しい警戒の中、ナンガラハル州知事以下の全地方政府閣僚、カブールから農業省代表、FAOカブール事務所の一行が来訪、地域からPMS代表一行、シェイワ・カマ・ベスード郡長と各郡の自治会代表(農民指導者)が一堂に会した。契約式は和やかな雰囲気の中で行われた。行政機関・農民側共に圧倒的なPMS支持を表明、今後明るい見通しを開いた。

PMSは建物と土地(1.8ヘクタール)を活動が続く限り利用でき、契約は5年ごとに更新される。

スピーチでは、水の仕事には敵も味方もないこと、本計画がアフガン人独自の手によるものであること、最終的に残って生きる努力をするのはアフガン人であること、「緑の大地計画」の成功は他地域に希望をもたらすことを強調、特に農民指導者が手をたたいて喜んだのが印象的でした。この二日前、シェイワ郡で農民層の支持を背景とするタリバン軍が政府軍と衝突した直後で、響くものがあったのだと思います。



訓練所は研修者と PMS 職員の宿泊設備、会議室、講義室らを備え、今後地域の農業指導、PMS 取水設備の維持に大きな役割を果たす。昨年 11 月、ペンキ塗装で
がっかりしたが、こうして見ると案外奇麗で、目くじらを立てないことにした。中庭は花園を造成し、外庭はオレンジ園が作られている。



クナール河増水期。カチャラ堰（マルワリードII）は悠然と水没。2018年4月19日



水門番小屋が建ち、少しずつ様になってきている。川の水が濁流に変化してきている。2018年4月19日



主幹水路約 200m 地点の柳の生育状況。植樹後 6~10 か月。活着率は 100%に迫る。苗床の作りが丁寧になってきているのだ。2018 年 4 月 19 日



強化堤防の樹林帯。シーシャムの幼木約 600 本が植えられたが、いったん枯死した。水やりを怠ったわけではなく、11 月に移植して早すぎたのだ。雨季の到来が遅れ、初冬に寒気が強かったのが原因と思われる。現在、全部植え替えて経過観察中。同部の堤防高は約 300m にわたって、冬の低水位から約 4.0m、少し高めにとっている。2018 年 4 月 19 日



用水路B区 2700m 付近。話は簡単でも、何せ気が遠くなるほど長いのだ。主幹水路全長 4.9 kmとベラ延長路の大部分を一年でやろうとするのが、少し強行軍。歩くだけで半日かかる。2018年4月19日



調節池Ⅳの現在。詰めの確認測量を終え、ベラ延長路と同時に進められている。作業地の分散を避けるため、植樹班を除く全員が集中する。池底は約 1.5m 底上げし、送水口（橋）と排水門の建設が始まった。ベラ延長路も基礎を十分に強化して工事が進行中。2018 年 4 月 22 日



調節池Ⅳの外壁はしめきり堤に一致する。調節池Ⅱと同様だが、ここは2015年夏に大きな分流が発生した地点で、強力な堤防を設置予定。2018年4月22日



シギ延長路の建設。堤防犬走りに相当する部分を拡張、コンクリート基礎を置き、小水路を建設。堤防素材はすべて粒径の比較的大きな砂利で、土は使われていない。緩速载荷に割く時間の節約ではなく、シルトを混入させると高水時に堤体の軟化、急流による吸出しが起きやすくなるためだ。旧分流自身がドレーン工の役目を果たす。2018年4月22日



現堤防の最下流端の6 km地点。住民が作った取水口の残骸がある。木や砂利で作って取水していたが、このような場所から洪水が侵入、年々河岸線が後退していた。ベラ延長路が来れば不要になるが、これはこれで人々の命をつないできたのだから、皆が評するように悪しざまに言う気にはなれない。ひどい被害は、むしろ援助の手が入った後で、力づくで作った取水口だったからだ。2018年4月22日

